

はの
埴野 謙二 (生・労働・運動 net jammers)

〈背後の未来〉が現在と出会うとき
——浦島太郎物語——

1. はじめに

—— (註・1)

- a. 問題意識——渋谷・小倉さんの話を、日本の社会運動の流れの中に、すえてみること／そのことを自らの遍歴を、たどってみることとして、試みること
- b. タイトルについて——〈背後の未来〉・〈現在〉と〈出会う〉(註・2)(註・3)
- c. 「アンラーニングプロジェクト」における位置づけ——プレ〈68〉
— 〈68〉—ポスト〈68〉—ポスト〈68〉を超える

2. 〈背後の未来〉からの遍歴

—— (註・4)

- a. 個人史をたどって——節目の「6」のつく年 (註・5)
- b. 流動する同時代の中で——「同時代」史から同「時代」史へ (註・5)
そして、再び「同時代」史へ
- c. 日本の社会運動問題史として捉えかえす
——武藤一羊「社会運動と分水嶺としての68年」を参照枠として
(註・5)(註・6)(註・6-1)

3. 浦島太郎・たちの帰還

——（註・7）

- a. 〈68〉年への視線史——黙殺／嘲笑／隠蔽から〈68〉年をめぐる認識の開放
・解放へ
- b. 様々な浦島太郎・たちの帰還——事実／比喻としての帰還　そして〈68〉年
へ／からの視線史の相互交通へ
（註・8）（註・9）（註・10）
- c. 「超越論的帰還」——〈68〉年それじたいの帰還　（註・11）

4. おわりに

——（註・12）

- a. 〈68〉年の核心——「可能的なものを求めよう、さもなくば窒息してしまう」
（註・13）
- b. 〈68〉年の（日本における）限界——未成熟な「他者」との交通の構造化
（註・14）
- c. 「米騒動」から90年！・〈68〉年から40年！
——〈生・労働・運動〉の胎動へ　（註・15）